



紅
闇
の
こ
る
む

著
・
ろ
っ
き
ゆ
ん











紅闇のコラム お試し版

ろっきゅん

序章

狼斗はただただ黙々と、今日の作業全てを終わらせ渾身の溜息。

頭を支配したのは——賢者の如し——一切混じりけなしの無心だった。

と、言っても。

彼は明日から高校生になるという年代。

つまり今は中等部卒業して高等部入学式を待つ、イケてる年代の15歳。

品行方正、とある事で博士号を【強制的】に取らされ、頭いいようにマスメディアにまで操作されたけど、——実は普通の少年から青年になる年代。

学力はヤバイレベル。

あくまで他人ができない別分野で功績を収めて博士号的な扱い。

まあ、そこらはおいおい話すよ。

さて、

実は俺、狙われています。

いや、ストーリーとか、やっかみ連中ではなく、他国の、ほら、大統領だとか他国の首相だとか、他国の国家ぶーさんとか、他国の、ヤヴェー秘密結社とか！ 国のトップの背後で暗躍する系？

それらの指令だろうな。

映画で見るような解りやすく、【ごー、ごー、ごー、ごー、ごー】とかいって、最新ヘリやらAIとかなんかでロープ越しに飛来して他人の敷地につっこんでくる、もう各家が自動迎撃システムいれたほうがよくない？

的な連中が日増しにふえているそうです。

俺狙って。

そんなのが四六時中、たぶん一呼吸する間に10人以上はドデカイ弾丸やら無人ドローンのガトリングガンやら、どっかの空母か原子力つんだなにかがレールガンだとか！サテライト（衛星）レーザーで狙ってるのか、いっそ、タングステンだかチタンだかの25mの棒を搭載した軍事衛星神の杖とか！

とにかく狙われてる。

気配で分かる。

いや、精神やられて過敏状態な訳でなく、わりとまじで。

惚れた美女の御令嬢。

そのおにーちゃん曰く――

かなりの国と、秘密機関だが、四六時中狙ってるから彼の財閥で雇ったスナイパーで消してくれてるらしい。衛星系統やレールガンだの無人ドローンだの通り魔装った輩など、彼の手の者が全部処分して、廃棄処理物として、ぐるぐるにまかれる、もしくは狙撃、爆破などで殺してくれてるとか。

ええ、実は彼、プラトニックな付き合いしてる彼女じゃないけど良い仲な美女瑠璃ちゃんのおにーちゃんたちは、世界三本指の中でもトップ駆けてる大財閥の御曹司と御令嬢。

なので裏世界はパパさんやオジーさんたちが、色々やってくれてるらしい。

その代わり、友、ということもあり、とある能力はある物をもつけ、精製、構築できるので、彼らの財閥の研究所ももらってるので、いろいろ便宜で、この文明の極みの世界が子供レベルになる発明を続けて、所有権は俺事、神斬狼斗が、大財閥の製品に、俺が改造して装着。

遙か未来でもこんな装置できんの？

レベルの仕事をしたりもして。

でも、基本、馬鹿です。

夏休み補習組です。

そんな馬鹿と認めてる終えに、世界のエネルギー産業庁とか、原発推進絶対至上主義団体の

おえらいさん（自称）が、あつまって、俺に会話という脅しをかけてるところから、この物語は始まるのです……。

——ぐっはあ、でだし長すぎ。超めんどいんですけど——

さて、それでは話を進めよう。

これは俺の奇怪な人生に横たわる、さらにメンドクサイ策謀の中で生きる一人のイケメン（自称）！の俺の華麗なる人生と、無数の性癖を叩き込まれた、勇者の物語である。

俺はある日、いや、産まれた時からか？

大地の光？

いや龍脈かな？

って思えるものが大地のあちらこちらにみえた。

他の連中にはみえないらしい。

使い方もわからないらしい。

だから俺みたいに発掘、液化化生成。固形化、塊 \parallel ブラックボックス。コア チップ。の三つの段階を作って所有。

とりあえず、色々な家庭をまわって、売り込んで、無尽蔵永久機関で、どんなエネルギーも須希望量を得ようとする電子機器だのマシンだのに、チップから接地。個人で持てる超エネルギー物質。『ギフレスト・コア』という消費されることのない永遠を閉じ込めたような無限の力を、ご家庭に提供。

とりあえず一都市にまわったら、マスコミ殺到。

言論封殺はじまったけど、ネット動画で覆面つけて、バラして、世界中から渴望されて——

今現在——狙われてるわけだ。

……世界中に。

ビフレスト技術研究——

そして俺が考案した、自国、他国（超高額）に売買して、売りまくったらおお金持ち。

世界中の銀行を掌握して——マジ全世界の銀行全部掌握できちゃって、いや、金でかつちまっただ。裏切られないように——

そんな資格を持つ非凡な才も持ち合わせる男の子……それが俺、神斬狼斗ちゃんです。よろしく。

だから今、世界中の大統領国家主席王室首相などが、
自国のエネルギー産業を牛耳ってる輩のトップが、

護衛？——という返答次第で射殺もいとわない！な空気だしてる連中と、街の公園に呼び出されて、もうこれ返答次第で射殺、もしくは捕まえて自白剤投与か拷問で、ビフレストを得ようと、金を得るためだけに群がった輩に囲まれていた。

もつとも、彼らは知らない。

俺がその液化化したビフレストを、体の体液、血液、内臓全て、心臓も、脳も、骨も筋肉も腱も筋も、全てビフレストを流し込んで、核ミサイルを圧縮して直撃させても皮膚すらもビフレストゆえに、防弾チョッキ？ 豆腐？ 水に溶ける雑魚雑魚ちNP？

くらいに見える体に変貌してるのにも気づかず。

だからこそ本来は俺には護衛もいらないのだが。

悪友の両親や祖父母を動かすために、つけてくれているらしい。

端的に言えば、世界全部から……狙われていた！

世界中に配る予定の神エネルギー発生鉱脈。鉱石。液化化したもの。コアにしたもの。パーツにしたもの、チップにしたもの——このチップ、まさにカケラで各家庭が馬鹿高い電力を払わないで済む、一般人には無料で支給しようとしてる俺だから。

——笑えるw

目の前のおっさん外人、マジ俺の事殺そうと睨みつけてるんですけど、隣の各国の経済界のドンだの。クリーンエネルギー派の主権者だの。

まだ依存してる原発推進派だのだの。

まあ、そんな騒動に発展しそうな輩どもや闇に隠れたヒットマンも、色々縁のある大財閥が、

今、こうして各国首脳陣とSPに囲まれてる中。

裏で他国自国一切合切射殺しようとスナイパーやら裏業界の特殊部隊出身スナイパーやら、暗殺者が、まあ、ガードマン？ が、射殺、刺殺、細菌兵器射出などなど、考えたくもない事ではあるけどグロく死んでるらしい。

というか、大気の流れと、湿度に次々混じる血液の粒子の放出で、俺の体は新エネルギーを自分の臓器や血液、骨や脳に体の全てに流してるので、もう人間やってる気はしないけど、感覚で、あ、また誰か死んだ。と、わかってしまうのです。

で、このおっさんの妄言から、だいたい状況は解ると思う。

「——さ、我が国の企業と契約し、その君の全ての発見、生成、製品にするノウハウを全て提供し、我が国の未来と繁栄の為、全ての著作権も譲渡し、輝ける美しい国、大日本帝国に無償で捧げなさい。天皇家下様の恩寵の賜物としてこの地に生を宿せたことに感涙し、全部提供しなさい。お礼は、寸志として、毎月わずかながら生活していけるだけの金額くらい、月に17万くらい支給手当をだそうじゃないか。だから契約書にサインして、我が国へ——」

「ちよつとまで、ニュージャパン！ 彼は我が国の企業のものとなる。永遠にだ」

これ米国。

「ふざけるな！ 全て我が国の物だ、ここで拒否するなら、君の家族、君の友人、そして君は二度と日の目をみることはないアンダーグラウンドに囚われ永遠に拷問を——」

これロシア。

「匪びゃんぶお pk;mw yojがご bhqfp:jauwghpurohw;JNDLFharejnfq Oruwpanvsjln; w dん
ふおな6-うお hq:piawjvdu; s:しな; V-IJNQ:aアイヤ~~~~~!!!アルヨ！ニーハオ！」

難しい言葉だ。

たぶん中国かかんこく（最近親しみやすく、ひらがなになったらしい）の、どっちか、よくわからんがな。中華も半島も！

と、一斉に上級国民スーパァーが、叫びあいの弁舌合戦が、きんきんぎゃーぎゃー！ちよつと

こして、ぶっ殺される。それが俺の価値観だ。お前ら上級国民とかいう下等生物は、俺を観たら土下座して通り過ぎるのを待て。それができてない、してないと、わかったら、お前らの国どころか、その前にお前らの家族は死ぬ、親兄弟肉親老人、そして、赤ん坊すら俺は殺す。そしてお前らの全てがお前らの目の前で奪われ泣き叫んだ時、国ごと消滅する。無論お前らも、二度と復活はできない。魂さえ輪廻にいかない。というわけで、はい、さようなら」

そう言って俺は立ち去ろうとしたが――

「マザー・ファッカー!!!!!!」

と、叫んだ、米国大統領の隣にいた、くそきめえSPが、何人と言わないのが、俺のやさしさ。

ヒントは、俺たちがスラングな言葉でよめば、ぶっころしてやる〜!

人種差別だ〜!と、殺しに来る輩。

でも、自分たちが悪いと、心で分かると、差別用語連発で、殺しにくる。

すごい我俣な、ちよつと被害妄想入りすぎだろ? 人種だ。そいつらがなってる職業が

SPだ。

で、懐から銃を出してトリガー連打。

弾丸が射出。

でも俺の目の前で弾丸は止まって素粒子分解。

塵芥になって消える。

それを引き金に、他のSPもレーザー銃とか出して打つが、レーザーもともって、分解。銃モレーザーガンも、そのSPも分解。ただ、SPは、泌尿器から、四肢、口、耳、両目、心臓、肺、顔のみ残して、どちゃ〜とおっこって死ぬ瞬間を永遠にも思える時間が彼らに流れて、全て爆破!消滅!

「それをつれてきた大統領とかいう雑魚も、罰がくだる!」

と、俺が宣言した瞬間、泌尿器も四肢も無くなり、口も眼も鼻も耳もえぐれて、そのまま転がった。

そうやって、誰ももう止める者がいない、夜の公園から、去っていく。

イカれた世界の各国上層部や財閥だの裏支配者だの。

この未だ全てを後悔していいない鉱石を使って、いま、おれは、無双してやる。
というかし始めている。

とりあえず世界のエネルギー資源での莫大な富を掌握。

鉱脈がこの星や宇宙に飛んでいるからか、全部、観得る。

正直荒ぶると、時まで止まる。

なら、おもしろおかしくいつてみたくない？

そんな世界へ、皆を巻き込むように……

ここから、物語は、始まる——

「あ、別に自分悪人風にしゃべりますけど、悪人じゃないよ？ 本当の悪人はあいつらや政財界官僚とか、繋がってる連中、今あいつらにいわなかったけど、命令してる官僚とか、同じ現象起こして死んでる奴、人間辞めて生きてる奴、そんな風にしたのは、のんびりスローライフを現実世界でしたい俺の怒りにもみたくない——戯れ。慈悲。憐憫の情からの発言です。

それだけのことで、

まあ、のんびりお楽しみくだっさい☆シ」

——と、話が進むんだけど、少し思うところがある。

「あれだ。悪友狩真が、初恋になってしまった奴の美妹の瑠璃を喜んで差し出すつもりだという。狩真の親族は、娘を俺にあげればビフレスト権利の全権てにいれられるとか、本気で思ってるんだろうか。なら、馬鹿だ。馬鹿な連中だ。そのころには、もう……:というかなにこれ、俺たちはプラトニッククラブしてるのに、政略結婚企んでるとか——なんか、この場合意味がなくない？ 互い好きあってるのにさ——」

奴曰く。

すでに両親も財閥の会長してる爺様も、俺と令嬢瑠璃ちゃん（13歳）の結婚には、おkでてるらしく、俺は彼女を許嫁とした！——とか、そんな感じにされてるのはどうしたものか。

さらに悪友は俺の事をマイ・ブラザーという。つまり、義弟よ、という事だ。

泣きながら叫んでたぞ……。

そして今の状況。

悩みがある。

夢の少女。

端的に言えば、紅闇色の膝まで伸ばして全裸のメスガキボディに絡まる髪。その紅闇の眼。

そして小さな顔は見下し目線で、小さな小鼻や小さな鼻孔。大きくなりつとした猫目。小さく上がった耳。

ながい柳眉から鼻頭までの稜線の美しさ。

まるで精緻にできたお人形のような子が、全裸で悪魔の尻尾はやして、蝙蝠被膜の翼を広げて、髪に金色の髪飾りでツインテール。

超、とか、という言葉が陳腐！

絶句モノ極絶超美少女!!!

見た目は最高の6〜8歳くらい？

10はいつてないだろう。

なのに支配者としか思えない見下す眼差しは誘惑目線。

ぷくりとした薄桃色の唇もかわいらしく。

みているだけでどうにかなりそうだ。

そんな人生がまっていた。

ああ、ダシタイ！

そう、俺は生まれてこの方、こいつに夢で封印させられたのか、どんなに美少女にいいよられても、うれしくても、瑠璃ちゃん以外で抱きしめて、そのまま大人の階段のーぼりたいのに！

へブンできない！

故に言われる……

この益体無し！と。

……ひどくね？

ただそれだけなのに。

「俺……この年でEDですか？」

そんな台詞で一日が始まる。

本編への序章

狼斗はただ、今日の作業全行程を終わらせ、安堵の溜息……ではなく、渾身の溜息を一つ漏らした。

今、彼の頭を支配しているのは連続20連射を、オツキオツキ君から放ち続けて、仏陀や釈迦さえなお到達できなかった無色界を漂う、悟りの極み、何兆年もの時を費やしてなお菩薩も如来も到達できない究極の物欲完全消滅、色欲に負けた帝釈天など、無色界からみたら、ただの蟻にしか見えないほどの、究極の境地。

スーパー賢者タイムに入っていた。

と、言っても。彼は明日から高校生になるという年代。つまり今は中等部卒業して高等部入学式を待つ、イケてる年代の15歳。

近年発掘された、というか狼斗しかみえないチート能力持ち。

ビフレスト鉱石をサーチできる能力。加工できる能力。現代科学でも未だに土中に眠る鉱石の鉱脈すら見つけられない。さらに狼斗が自らが考案開発した最先端技術、個人で持つ事を可能にした——安全神話とかほざいてたくせに、バンバン大爆発を起こした原発。そのエネルギーがゲームウォッチの丸形電池くらいの電力にしか値しない超高濃度結晶体鉱石。

世界のふんぞりかえっていた原発主体の電力会社や裏でつながっている軍事産業を軒並み全世界規模で株式的にも大破壊。

そしてあらゆる機関からの暗殺誘拐などを、踏破。記憶にないが。

ゆえに親玉みずから出張る。

マスクなんかしながらネット動画経由で。

だから狼斗は囁いた。

そんなに欲しいなら、

気が向いたら優先的にまわしてやるぜ？

なにを？

いつてない。

それでも連中はやってきた。

そして恐怖の契約をさせられ消えていった。

今は狼斗の発見した鉱石ビフレストが、全世界のエネルギーの主軸になってしまった。

しかもエネルギー抽出も生産開発ほどの企業も一切できず、まるで狼斗以外さわるんじゃねーよ！

と、いわんばかりに、狼斗だけが抽出。搭載マシンを構築し、そのブラックボックスの多さもさることながら、狼斗が仕掛けた幾つもの機械はビフレスト・コアとして（チップや鉱石、パーツといわれるコアを覗く三種類が主流）、その大きな鉱石の生成純度の高い物が、

狼斗の提案で、世界平和の為に、

それに狼斗考案のパイプをつかって、

市民の生活にかかわる施設などへ流れるように提供するというサーボパフォーマンスを施し全世界に決まった数。

間違っても全世界の兵器開発には利用できないように巧妙に細工され、また下手にいじれば、速攻爆発を起こして——特異点でおなじみのブラックホールが出現、隣の半島と、うっさい隣の大国全部。

消えた。

その後を追いかけるように、米国も消滅。

ロシアもアフリカも印度もオランダも英国もフランスも中東も。

亜細亜圏も、カナリー。

大爆発の後、ブラックホール発生で、消えた。

人は、すごい力得たら文明崩壊しちゃった♪

と、いったとか。

狼斗の作成したマシンを解体しようとした罰を受けて、完全に世界の大部分が死に絶えた。

そんな彼が、彼のみが作り出せるビフレストの鉱石からのコア装置。

それは基本的に神宮寺財閥にのみ売買されて、車、バイク——今ではエアロ、もしくは、アウブラとよばれる——通称。機体——となって販売。

空中に狼斗考案で作られた不可視の道路と、誘導点灯で、空を飛んで走る車体系の生産の独占企業となった。

弱い微弱な力……それでも、空母クラスなら平気で動かしレールガンを50基、一斉に発射できるほどのエネルギーをださせるので、残った世界はまだまだ狼斗を浚うか、拉致して拷問、秘密を吐かせてから殺すかの二択に迫られ、それを神宮寺財閥の息子であり、狼斗の幼馴染の悪友。またその妹の嘆願によって、彼の徹底的な警護で消滅させていた。

静かに暮し狼斗の周囲は血風舞い踊る恐ろしい場所となっていた。

でも今現在、巨乳で美人すぎる店長の下で、鼻の下を伸ばしながら、惚れてる悪友の妹の存在を忘れるのに専念するかの如く、

ただただ新しいエネルギー装置を。

72個の特殊装置以外の、まったく別種の装置を作り出し、女店長さんの元で、超エネルギー物質。『ビフレスト・コアを弱めた物質』をもちいた半重力で浮き、ニトロ並みのエンジンで空を駆ける機体をさらに造り続けていた。

今現在は小型機のくせにこのパワー。

曲がり切れないが計測できた速度はマッハ5までは出る。

第一世代型だ。

そんな彼が、起こそうとしてる一大ビジネスであり、新たなスポーツ。

それに向かって、全世界規模の新たな試みを夢物語のように描いていた。

そんな彼の重いため息が、一日の始まりを意味していた。

「——またか。まさに夢の幼女に今日も出会ってしまった。夢の中で僕を調教し続けて、色々な性癖を刻み込む僕だけのご主人様」

……ついに狼斗は夢の幼女にだけは屈服して、あらゆる性癖を叩き込まれ、もう彼女が現実に現れてくれない限りは射精は不可能だろうレベルまで悶絶調教されてる彼は、瑠璃にだけはバレないようにがんばる男の子。

「もう、7年2か月——射精をこころみだが、でない。彼女のイケない地獄調教開発で、僕はいちども彼女に勝てない。彼女はなんだ？ 俺が望む本性、ロリからの創造物。股間を蹴り飛ばして、ついに懇願して蹴ってもらおうようになってしまった。アブノーマルな俺！ 情け容赦ないメスガキだが……」

……嫌いじゃない。

思わず股間を握りながら制服へと着替えていく。

「それに、あれがでて性癖管理指導されてるのはわかってるが、彼女が現れない眠りは、凄まじい流血の世界。悪夢に代わる。食われていく大人の女性と、殺されていく仲間や自分の姿は、おぼろげになっているが、寝ているときに見れば鮮明だ、そこは記憶に残っている。目覚めと共に、何か、大切な記憶が消えていく事も」

そこでまた溜息。

「でも、まあ、……あんな悪夢みせられるよりは、幼女に溺れるほうがましなのかなあ」

彼女の夢を見ない時、それはいつも同じひどい悪夢をみせつけられる現実。
そしてその度に起こる記憶欠如。

それゆえに幼女にけたぐり回されたとしても、彼女の夢を追い求めてしまうのが彼の日課でもあるのだが……

神斬狼斗の想い人は、バイト先で隣家のおねーさま。
と、神宮寺財閥の孫娘——神宮寺瑠璃だった。

彼女は清楚可憐な13歳。
狼斗とは幼馴染でお互い物心つく頃には一緒にいた存在。

ゆえに、思春期になって、何故か射精ができない彼は、彼女に告白すらできず、許嫁になっても、一度もデートに誘っていない。誘ったら襲いそう。でも不能！ プラトニックな関係だった。

何故彼女が、狼斗を気にしだしたのか。

その意味は狼斗も知らないが。

なにより……

「彼女J.C2年でお胸……大きいです」

ちよっと13歳にしては盛りすぎじゃありませんか？
マジに質問したくなるほどの誘惑を掻き立てる巨大なお胸。

狼斗の頭を全ての煩惱が災禍の中心の如く、いけない心が満たしていく。

でも、どうにもならない……問題があった。

むろん、彼女じゃない。

その、……兄だ。

瑠璃の兄貴は、狼斗の腐れて腐れて爛れ腐れ切った縁のある……正真正銘の悪友だ。

瑠璃の場合は男子憧れ、教師まで危ない眼差しをみせるほどの超美少女。

だが、その兄も黙っていれば瑠璃と同様に、全女子の憧れ。ついでに聞いた話じゃ女教諭たちも狙っているとかいう、超物騒な話がちらほらするほど、イケメンだった。イケメンだった。

憎くて悔しいので、あえて、あえて二度言った！

彼はいつも朗らかに笑って黒マントを翻して魔王よろしく、机の上に立って、いきなり演説とかはじめる変な男。

——もう、生徒会長にでも立候補しちゃえよ。

とは、狼斗もよくいう言葉ではあるが、彼はそれを閉ざした眼差しで満面の笑みと共に受け止め笑顔でその提案を否定するよう払拭する。

しかも、彼はどうも中毒状態のアニメヲタクで。

「いや、吾輩、リアル雌豚に興味ないし」

「は？」

「いや、だから吾輩現実のダブルエックス染色体の発情期にいちいち関わっている暇ないから。今期のアニメチェックで忙しいから」

そんな事を、平然と学園一のイケメンが言ってるのだから。

ちなみに、体力だけは狼斗の成績が一番だったりするが、そこらへんは意味がないので割愛しよう。

さて、彼の続きの話をお聞かせしよう。

「いや、吾輩ね、小さなころにショッキングな出来事があったって、好きだった女子が殺されちゃってね」

「は？」

「うん。だから、あの子の事が頭にちらつくから現実の女はみてもみてないんよ。だからアニメの美少女のおっぱいの揺れ具合を——」

その瞬間、狼斗は何も言わず、彼と硬い固い堅い握手を交わしていた——のも、とりあえず割愛。

「なわけだね。電子の二次元美少女が一年で四回も俺の嫁を映し出すんだ。リアルな雌にかまけられるわけではないか。あーっはっはっはっはっは」

そして、彼は口癖のように狼斗を

「マイ勇者」

「マイ・エターナル・フレンド」

「マイ・ディア」

「マイ・ブラザ」

等々。

人前でもこれだ。

本気でやめてくれと頼んだら、

「吾輩が貴様の言に従い、このワードをやめてもいい条件を飲んでくれるならば」

「なにを？」

「妹と今すぐ結婚すると世界に発表しろ。」

「国連から世界各国を動かしてある事を実行したい！」

「ある事ってなに???'」

「かつて大昔第二次世界大戦で敗戦国となった日本は外人に逆らえない裏の法律があつてな、その圧力つかつて日本国内の結婚年齢変えさせて見せる！」

——とか、ほざきやがる！

しかも真顔だから手に負えない。

「安心しろディア。法律かえさせるのは間違いないが、それができないなら4〜5歳児を買い取つて、8歳児で戸籍を入れて結婚できるイエメンの法律を順法させようではないか。」

「なんだつたら、直接貴様と瑠璃の二人にイエメンの国籍を手に入れてやる。手に入れて瑠璃と結婚。」

「向こうは8歳で結婚可！」

「一夫多妻制の国でも国籍取得させて、お前の望む褐色美少女もてにいれられるようにする！買えばいい！」

「遠慮するな！」

「ついでに、あのお前の身請け人になつてる店長殿もおもちかえりすればいい。我輩の調べでは、店長どのはマイ・フレンド！ 貴様に惚れてると調べがついてるぞ？ やつちまえよ。な？」

「そして共にいおう。」

「ありがとうコーラン、ありがとうアラー！」

「あなた方の教えこそ、全世界の法律になるべき存在だ！」

「そんなつても、俺はいきなり時間が来たら大地に土下座して聖地に向かつて、土下座くりかえしなんかしないからな！」

「はっはっは、それでも国籍とつちまえばこっちのものよ。イエメンはコーランという聖書から法律を作つたという、とても素晴らしい伝説の地だ。よかつたなディア」

「そんな話をしながら中等部を卒業した。」

桜の季節に少し早い木々と青空を二人で眺めながら、狩真の独り言が聞こえてくる。

そんな世界の物語――

「そして今日も、俺は夢の中で快樂拷問でもう奴隷。
なのに夢の姫君は放してくれない。

いつも、

いつまでも、

目覚めるまで体をまさぐられ、

指先でかりかりと、狼斗の大切な暴れん坊將軍！

を、余計怒張させるのだ！」

終わることをしらないテクの数々……。

――こんな心境にも関わらず、ただただ俺の息子は頑張って、我慢させられて、ただただ大きくなって、インドのヨガの最高峰の長く伸ばせるよ？ の術法すら超えたフルヴァージョン

ロングロング！ ビックビック！

金剛石破壊可能ヴァージョンだ！

そして、耐えるこの頑張り屋さんに、この糞ビッチな悪魔娘は、釈迦でさえ我慢不可能だったろう、マーラの誘惑すら超える状態に陥れてなお、こんな事をささやいた。

「そうじゃ、お前、新たな――性癖を植え付けてやろう」

「な、なんだとお」

恐れていた、その言葉がもたらされる。

すでに五感の全ては、彼女のハイテク、スローテク、見せかけ倒しのラブラブ愛撫で、五感消滅。

「――貴様、好いた娘がいるじゃろう……」

――ドキ。

狼斗はあからさまに硬直、そのままおそるおそる。

でも彼女は、狼斗の生命のたまり場を背後から、仰向けに倒れさせられた狼斗の無防備な弱点ふみつけて、カカトでグリグリしながら。膝でゴツンゴツンしながら、耳元で囁く。

「決めたぞ。お前、ミルドアールの姫たる貴様の正妻と、別に、さらにバイト先の店長——超美乳で、超美人なおねーさまにも憧れておるな。この妾というものがありながら」

ジロっと、まるで朝のさわやかな時間、新人サラリーマンが夜中リバースしたもんじやの如く。

冷たい眼差し。

それに狼斗はトウク！

「じゃが、好きになった女が、知らんところで、チャラ汚物に捕まり、貴様がさっさと苗床娘にしないから、種付け汚痔産やチャラ汚物に喰われちまうかもしれないぞ！ケケケケケ」

「……」

「そし気づけば次々に好きになる女性のが、必ずチャラ汚物に寝取られる——その展開を延々と叩き込まれ、いつからかそれに反応して勃起、射精する夢を見させてくれよう！」

彼女は確かにそう囁き、夢を見せつけ、仲良くさせられ、

「うおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

ゆえに、新たな性癖は植え付けられた！

NTR!!!

今の狼斗は気持ちよくなれたのだ。

そして幸せの絶頂の中で、めをさました。

そんな時だった。

端末から音声。

音声モードになって顔は出ない。

つまり秘密主義の狩真からの電話だ。

【勇者よよく聞け。祖父から研究資金のみならず、巨大ビルディングの一つの階まるまる貰った。だからお前の所有物で固定資産税とか収納の義務に値する数々、全部神宮寺財閥で出すので、最新研究機材もはいつてるから、必要なら助手を雇っていいという事だ。破綻倒産しない分野での大事業を勝手にやってよいとの事】

「え、あの、話見えない」

「あ、考えなくていい。お前の専用研究所ビルが出来た。そう思え。完全秘匿の研究所でスパイも盗賊も入れやしない。お前が研究員を必要として、何かをしても、あるランダムで時間を決めて、研究員の記憶は搾取、消滅。次の日戻ってきたら記憶を植え込み直し。それをくりかえすから外部機関や他国は知らない。知ることができない。というわけで、これからもがんばってくれ一定時間で、ビフレスト抽出、精製、固形化——ビフレスト・コアのさらなるヴァージョンアップ。そしてついに医療機関を作り、貴様に従った物のみを知ることの出来る。ビフレストの液化での変換。お前の欲しい設備……だったろ？ だから全部用意させた】

イケメンボイスを軽やかに振りまく謎の男のような狩真がそう連絡してきたので。

「マジに手に入れてくれたか、さんきゅ。で、例の薬は？」

【うむ。コロナやエイズもガン——は、狼斗製薬。という名で売り出した薬ですでに成功。その薬を一日三回飲めば。難病だの治癒困難だのと言われた病は——完治した】

「よかった」

【そうでもないぞ。敵は増えるはずだ。気をつけろよ】

喋るだけ喋って、朝一のすがすがしさをすつとばされ、狼斗はようやく立ち上がって伸びをする。

「まあ、でも、医学の方は、研究の偶然、副産物なんだけどね——」

と、狼斗は重いため息。

——別に病人治す気は全然なかった。
たまたま出来た液体が、病気に効いただけ、それだけだったのだが。

そんなことを考えながら、高等部入学式が始まるまで、狼斗はバイトに明け暮れようと思っただ。

なので、徒歩でゆっくり街並みの住宅街を歩いていたのだが。

ばしゃ。

……と、写真を撮られた。

「むう〜これで妹の依頼は達成だが、いいのか、これ渡して……性活が、ちょっと激しくみだれそうで吾輩怖い。ディルドなどで散らさず、純潔はとっておけ、勇者は新品女にしか興味がない、だから幼女を好むのだ……とか言ったら、北海道土産の熊のアイヌ彫り投げつけられたわ、わっはっはっは、よーし、とりあえずこれで仲直りだ！」

「おい、ちよとまで、いま生活のニュアンスおかしくなかったか？」

そう、道の角の看板『痴漢に注意』の裏に奴がいた。

そして肖像権ガン無視で写真撮って、妹に渡すという。

「というか、ここに来るならさつき端末で連絡入れる必要なかったろ！」

それに悪友はカンラカラカラと笑う。

「まあ、我輩もちよつと顔を見ておきたくなった……ということにしておいてくれ。ちよつとかなり周囲で死人がでててな」

「は？」

「いや、たぶん、ネオ・メリカ……ほれ、お前がレンタルしたビフレスト・コアの入ったブックボックス。空けるなよ。空けるなよ。絶対に空けるなよ！っていったら、やっぱ空けて吹っ飛んだアメリカ大陸。一応、世界大陸復活機構が、大量の廃棄物を一応濾過して、あの国

があったクレーターと化した場所の周囲に固形化し流し込んで、新しい大地を作ったんだよ。で、そこは今、犯罪根性しかなかったメリケン野郎どもがなくなって、新しい工場と濾過装置付き煙突——というか、貴様が発明した工業排煙除去コスモクリーナーを設置して、これから世界のおもだった製品を作る国になったらしい」

「へ〜」

「あまり興味なさそうだな」

「そりゃ、どこも人が集まれば利権ほしさの連中が溢れて、糞になる」

「なるほど。でも、そうならないといいのだがね」

と、空から降りて来たフライヤーという飛ぶ自動車もどきからロープが投げられ、この悪友は高笑いを上げながら空中に連れていかれて、やがて高速モード。凄く車体の後ろでぐるぐる回りながら、確実にマントが大気との摩擦を邪魔して絡まって回転してるのに。

それを手放すことなく、彼は目の前から去っていった。

ので——

狼斗、先に述べた通りバイト中。

春なのに温度40度近い、ちよい昔はバイク専門店。

でも今はおじいさんになった本来の店長から店を貰った娘さんである、現店長プロポーション拔群の一人社長、一人社員してた女店長さんと、隣家ということもあり、バイト希望ではいって。

いつも二人だけの時間を過ごしている。

無論研究の為に、神宮寺の研究所には行ってはいたが、盗まれそうな気がして大事なデータだけ持って帰って、しまってたら、全員処刑されたのか音信不通。

先の狩真の端末経由での連絡通り、ビルごと研究室が貰えた。

あとで新しい人材をピックアップしてもらって、ビフレストの方も研究しないといけなないのだが。

だが今日は、美人店長のツナギと汗だくの体を視姦しながら、狼斗は今日もはあはあして

いた。

すぐ近くで爆音あげてメーターチェックしてる女店長のツナギで分かるお尻を眺めつつの発言だ。

真剣に、あの豊満なボディを俺の物にしていいですか！ つていつてみたい。

いえば間違いなく店長みずから頬を染めて、いや、絶対染める。

店長は間違いなく処女だ！

——狩真の調べでも俺に惚れてると言っていた！

だからこそ恥ずかしそうに、『私を・あ・げ・る☆』とか、いつてくれるかもしれない。そしたら答えよう。

——愛してます、初めてお会いした子供のころから愛してます店長！——

と、叫んで、そのまま二人で交尾したい。

いや、卑猥な言い方はいくらでもあるが、交尾が妥当じゃない？ だって、虫だって、動物だって、そういうでしょ？

だからあえてそういう。

そもそも過去に、子供たちの学芸会のあとのビックイイベントで小学生低学年にビフレストでちよっとしたプレゼントをしたことがある。

その時に紙芝居をしたことがあったが。

——タイトル

子供にも優しい赤ちゃんの作り方講座。

赤ちゃんはコウノトリがキャベツ畑に運んでくるんだよ？

なんてふざけた事を、決して吹聴して子供の性教育を操作するようなことはさせない。

それが狼斗の主義だった。

だから授業でやっとな女の陰部の意味を説明する！

そして学校や外での不純異性交遊禁止！

ビフレスト搭載マシンの設計から物品調達。
そしてパーツ間に組み込まれたコアの超軽量核を搭載。

このちっちゃなチップ一つで、ストフリとかライフリとか、公開まで隠してるフリガンくらいなら余裕で兆を超える倍のパワーが出せて、相手の機体なんて破壊できる代物だ。

——この前これでライトニングブレイドつくってみたら、やたらめつたらぶったぎって、ちよつと怖かったけど、家の金庫にしまつてある。

——まあそんなことよりもだ。

コムナモーターズが販売するオリジナルマシンの作成『機体』というものを店長と二人で作っている。

そんな二人きりの職場にて。

店長曰く、

「ひとりぼっちでバイクやスクーターつくっても、今じゃ時代遅れだから、で、全然お客来なかつたけど、狼斗君がコアの最小結晶を機体の各パーツに組み込むように設計してくれて、裏ルートみたいなお店！　なんて悪評もたってるけど、神宮寺系列、って、名前つけさせてもらったら、変な連中もこなくなつて、そんでお店はようやく、というか、いきなり凄く黒字になつたよ！　ありがとう狼斗ちゃん！」

と、その豊満な、もう何とも言えない巨乳の女店長に抱き着かれて、狼斗はただただ「うっ、」と、呻いて、下半身が荒ぶり、中から出せない何かに悶絶しながら、ただただ幸せな日々を過ごしていた。

そんな機体作成——今では普通に国内のみで販売、皆が購入して乗ってる単車【狼斗策】の左右に巨大な円の推進装置やジェット燃料で空中にすつ飛んでいくバイクだった世界。

それももうすぐ過去の物。

狼斗のまた作る『機体』とシンプルな名前のエアロバイクとは違う、普通のバイクの状態から、音速以上を超えるときは翼が側面から生え、ヘルメットは体の襟元に仕組まれたナノマシ

ンにナノ分解されて吸収。前面にキャノピー型のエアロフォームが作られ、

ノーヘルで音速5回超えの、このマシンを操るのだ。

もつとも今回の量産化、今瑠乃が狼斗の考案でデザインされた黄色の機体は、わざと速度制限させて、リミッター外してもマッハ1でるかどうか。チップの量にも左右されるが、音速5回越えのマシンは、いま、狼斗が【ジャンク】でつくっているもの。

しかも黄色は量産という意味を特許として取得している。

レースマシンは、好きな色でどうぞ。

なので、狼斗は蒼にしている。

蒼い機体——何故か、異様に懐かしく、嬉しい気持ちにさせるからだ。

おかげで中二病な名前までつけている。

のちに狼斗は瑠乃店長に言う。

「うん、キャノピーが耐久トッパしてぶっこわれて、それでも走る馬鹿がいたら、乾燥目の乗り手が増えるね、眼医者も忙しくなる、あはは」

と、大笑い。

それを店長に話したんだ。

と、いったら、さすがの狩真も『そんなレースや店長さんとお話してたのね』と、ドンビキだったのは、良い思い出だ。

しかも狼斗の野望は終わらない。

機体をコムナモーターズ販売、資金提供神宮寺財閥。

となっている現在。

このコムナモーターズも狼斗の希望で隠蔽してもらっている。

名前はある。

特許等の関係で、ただし住所地は日本のみ。

それがどこにあるのか、世界中の政財界はやはり諜報員を派遣するが、神宮寺のセキュリティにひっかかり、皆——消されている。

なので、このバイトは狼斗にとっても実りあるものであり、集中したい作業の一つ。

しかも狼斗はさらに機体におもしろギミックを搭載すれば——

「最近忙しくなりましたね」

「そだねー狼斗ちゃんのおかげかな？」

「いえいえ美人店長と一緒に時間を過ごせるだけで幸せ！ただ瑠璃ちゃんが最近研究室こないで、おねーさんのところばっか！って怒ってたのがまずいかなー。って。でもエーテルやビフレスト系。これからなにごおるんだかまだまだわからないから、真剣に——」

とか呟いたら。

チュ☆

頬にキスされ、啞然とキスを送ってきた主……つまり店長をみてしまう狼斗。

その姿に店長の瑠乃はクスクスと微笑みながら、

「今日、また良いマシンを作ってくれたお礼。このマシンだったら20万円は平気でひきあげられる値段に該当するマシンだよ！しかも空中を飛ぶご老人のリモート車いす。最高時速132kでリミッタ作動。エコだねd（・w^）」

と、店長が天然の誘惑。

狼斗が今完成させたばかりの単車に人差し指でつつくと触れ、そして何も言わず、ただ、うふふ……つと微笑を残して石と化した赤面だけの狼斗を置いて去っていく。

見事なくびれと、腰とお尻を揺らして見せつけるかのような誘惑な歩く姿は生唾もの。

そして我に返り——あれ、俺今キス……された？

——え、もしかし、俺、本当に……誘われてた!?

